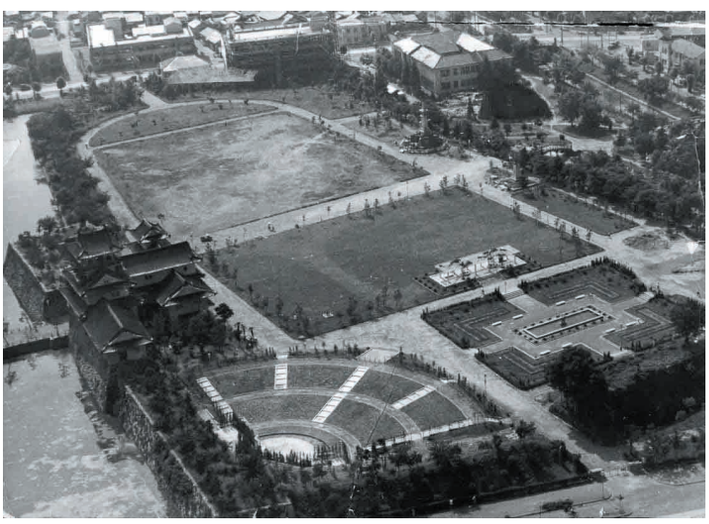
(3) 戦後のお話

空襲を経て、城址は変化を余儀なくされました。空襲後の瓦礫を埋めたり、戦災復興都市計画で新道路が建設されたことなどから、周囲に残っていた堀の埋め立てが進んだのです。

まず、空襲で焼けた瓦の処理のため北側の堀が埋め立てられ、次に道路（現在の城址大通り）を新設するため東側の堀が埋め立てられ、また城址の南東角も削られてしまいました。西側も建物が建てられるたびに埋め立てられていきました。そして最後に昭和３７年、旧消防署新築のために、西南隅の堀が埋め立てられたことにより、堀は現在のような形になりました。城址公園の外周と内側に大きな高低差が見られるのは、そこが元は堀であった名残です。



昭和 30 年代の城址公園
木もあまり生い茂っておらず、消防署も建てられていません。

城址公園内の外周と内側の段差
手前が堀だった部分で、終戦までは水が湛えられていました。

昭和４６年には、城址の地下に駐車場が建設されました。急激な車社会の発達の中で路上駐車が多くなり、市街地において問題となっていたためです。北陸初の地下駐車場でした。「車社会」という新しい社会の到来による、違法駐車問題解決のため必要不可欠のものでした。しかし一方で、城址の地下に眠る貴重な富山城遺構の大規模な破壊を招きました。

開業当時の駐車場入口
『富山戦災復興誌』より